

氏名	趙 エン
ヨミガナ	チョウ エン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第429号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 非日常性を演出する茶空間の研究 〈作品〉 陋室・茗

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	橋本 和幸
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	藤崎 圭一郎
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	清水 泰博
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	尾登 誠一
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	長濱 雅彦

（論文内容の要旨）

本研究は、現代社会において特に都市居住者が日常生活のスピードに追われてストレスが溜まっている現状に対して、茶空間を創出することによって改善を試みるための提案である。人々は忙しい仕事の後、日常生活に離れて少し休み、落ち着きリラックスできる空間を求める。本論文では、物質的な豊かさのみならず、精神的な豊かさの向上も指向する空間デザインの具体的事例を示す。どのような空間の中においてリラックスし、仕事などで疲れ切った精神を回復できるのか、あるいは過剰な欲望を抑え、心を落ち着く生活を送ることができるのか。そうした問題を追求していく。

筆者は現代の人々にとって、非日常的な茶空間が精神的に豊かな空間であると考え。言い換えると、茶空間は心を癒す象徴的な空間であり、精神的に豊かな空間であり、文化を育む重要な場である。

茶と人の生活には深い関わりがある。唐代の文人、陸羽はその著書『茶経』において「茶者、南方之嘉木也」と記した。茶は元々薬用として人々に知られていたが、次第に清雅な飲み物として、皇室、貴族、僧侶、文人、庶民まで広まった。現在では大衆に愛され、日常生活の中で欠かせないものとして存在している。

茶は長い歴史を持ち、飲料として愛される一方で、深い精神性を有するものでもある。茶は媒体として、儒家の「中（ちゅう）庸（よう）」と「仁（じん）礼（れい）」、仏教の「禅」、道家の「天人合一（てんじんごういつ）」思想を反映している。茶は「調和」、「静寂」の象徴として実用範囲を超え、人々の精神生活に入ったのである。明代の「茶寮」はこの代表的な非日常茶空間である。茶寮で茶を味わうことは、高雅な行いで、自然との対話の一種とされ、人間と自然との共生を象徴する行為とされた。

日本の茶文化は中国から伝来したものだが、侘び茶を生み、独自の茶室文化と美意識を確立した。千利休が作り出した「待庵」は極めて狭い空間の中に、緊張感と豊かな広がり創出することで非日常に至る日本の茶空間の代表作である。「和（わ）敬（けい）清（せい）寂（じゃく）」や「一（いち）期（ご）一（いち）会（え）」は茶の精神である。日本の「茶の湯」は五感を駆使する生活の中の芸術である。

中国の文士茶も日本の侘び茶もともに精神性を重視し、質素な環境で清雅脱俗を求め、自然との交流を大切にしようと指向した。これは東洋茶文化の特徴といえる。茶を飲むことは、単なる喉を潤わせる行為ではなく、精神文化の一つの顕れになっているのである。

茶を巡る精神的な豊かさは、茶道具や家具や空間などにも顕現している。茶を楽しむ空間を構成する色彩・素材・形態・文様は非日常性を演出する。庭を含めたそうした茶空間の中で、外の風景を眺めながら、茶を喫することは、環境と主体を一体化させ、現実世界を忘れさせる最高の精神的な贅沢といえるものである。こうした空間の創出は、現代の人々にとって非常に大切なことと考える。

筆者が提案する茶空間は、日々の生活の中で仕事の打ち合わせをしたり一人でリラックスするために喫茶店やカフェや茶館に行く行為とは違い、同時に精神性を高めるために完全に非日常を非常に巧妙に演出された茶室や茶寮とも違う。脱日常ともいうべき、即ち、日常の中にある非日常、また非日常より日常に近い融合な空間である。

筆者は中国と日本の茶文化の歴史と茶空間に関する資料の調査・整理し、それらを比較・分析した結果から、現代にあった方法論を導き出し、非日常性をどのように現代生活に導入するかについて研究を行った。

筆者は茶空間のスタディーを通し、最初に住宅内の茶空間や中国の伝統的な床榻(しょうとう)からインスピレーションされるようなデザインを家具化する空間演出を試みた。しかしながら、その茶空間の家具化の試みは既成の概念から離れることができずに非日常性のやや欠けた物足りない空間となってしまった。そこで今回の博士審査展出品作は、独創的かつ非日常性を顕在化させる空間を作るために、安価なダンボールと毛糸という素材を使った実験的な空間を作り出すことを試みた。ダンボールを使用することで、既成の窓や建具とは一線を画した造形が追求でき、ダンボールの穴ごしに光やシルエットや所作が透過する幻想的かつ神秘的な空間演出ができることを実作によって明示した。

茶空間の非日常性を演出する要素の一つは、光による空間の濃淡変化ではないかと考える。中国の伝統的な花窓や格扇門と、日本の障子や下地窓は、ともに外と内をつなぐ建築的要素であるが、中国の花窓は輪郭が明らかでコントラストが強いのに対して、日本の障子は繊細な質感で、微妙な明暗変化がある。筆者はこのふたつの特徴を融合し、新たな透過壁をダンボールによって作り出した。光と影が織りなす濃淡変化が内と外の空間を繋げるこの非日常性の演出は、本作の中核をなすものである。

現代社会の茶空間は、組み立て型の家具の仕組みを導入することで、可動性が高いものとなり、同時に様々な素材を採用することで、今までにはない新たな形態や表情が与えられてしかるべきである。そうした理由から、筆者はこうした非日常性を演出する現代の茶空間の提案は、過去を継承・発展し、新たな空間デザインを築き上げる意味でとても深いと考える。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、中国と日本の喫茶のための空間の成立と系譜を読み解くことで、両国の茶を巡る文化を比較し、そこから抽出された論点をもとに、自作の一連の茶空間の制作コンセプトとプロセスを語り、現代人の日常生活に非日常性をもたらす新しい茶空間のあり方を提案したものである。

筆者は、中国の茶文化の歴史を論じ、特に、明代に文人たちが茶を飲むことを通して、自然と対話し、「天人合一」の境地を求めて「茶寮」と呼ばれる草庵を作っていたことに注目する。また、中国の伝統的家具である「羅漢床」と呼ばれる長椅子で茶事が行われていたことや、「榻」(とう)と呼ばれる寝台の上で文人たちがくつろぎながら書を読み茶を喫していたことに焦点を当てる。

つづいて筆者は、利休、織部、遠州などを参照しながら日本の茶空間が、極小の空間の中に侘び寂びの美学を凝縮しながらも、開放感や外部と内部との連続性の中に自然との一体感を感じさせることを指摘し、中国と日本の茶文化を対比させる。筆者は中国と日本の歴史の比較の中で、自然の中に草庵をもうけ自然と対話することと、凝縮された自然を作り出すことで自然と対話するという、両国の自然観の違いを浮き彫りにする。

筆者はこうした比較の上に、日本と中国の茶文化を継承・融合し、現代住空間のなかに設置する独自の喫茶空間を提案する。まず、中国の家具の系譜を受け継ぐ家具化された茶空間作品の制作を述べ、その後、日本と中国の双方の茶文化を融合させながら発展的に継承する、非日常というよりも脱日常というべき、「陋室・茗」と題された茶空間作品を語る。「陋室・茗」はダンボールで作った茶空間で博士審査展に出展したものである。

ダンボールというどこにでもある質素な素材を使用するということや、外と内をダンボールに穴を貫通する光でつなぐことは、日本の茶空間に通じる。一方で本作品の空間構成は天人合一をベースにし、中国の伝

統的な花窓から発想を得た文様を壁面に全面的に施している。

本論文では、単に伝統をそのまま継承するのではなく、空間デザインを通して日中の文化を融合し、東アジアの茶文化の発展的継承する手法が具体的な作品を通して明快に示されている。こうした考察は、複数文化との融合や伝統の発展的継承を指向する空間演出デザインにとってとても有意義なものである。よって本論文は博士学位取得に相応すると認めることができる。

(作品審査結果の要旨)

趙琰の博士課程での中心となる作品の「陋室(ろうしつ)・茗(めい)」は本人が考えるところの、日常と非日常の中間に位置し、現代の生活の中にあって、休息したり、またリフレッシュ出来る空間を住環境の中につくり出すことの提案となっている。段ボールという現代においては見慣れ、ありふれた素材を用いながら、精神を休息させ、飛翔させ、また集中出来るような場をつくることの提案である。空間を構成する素材として段ボールを選んだことは、千利休に一つの到達点を極めた日本の茶の空間の本質(身近にある、特に価値あると思われぬものに、改めて美と価値を見出すこと)に沿ったものであり、現代における素材の選択として適切であったと思われる。また壁面に中国の伝統的な花窓のイメージの窓を現代的解釈で組み込むことも、ある程度成功している。

ここに至るまでの作品では、(作品1)はマンション内に茶室的な場を作る提案をし、(作品2)では家具としての茶室的空間を、(作品3)ではより展開の可能性を広げる為に、システム家具的な茶室的空間を構想・制作している。作品1、2の段階ではまだ中国的な印象が強かったが、作品3ではそこに日本的なイメージが加わり、最後の博士制作(作品4)では、空間を構成する部材に日本と中国の中間的なイメージが見られるようになり、その部材で空間を構成するものとなった。出来上がった作品は、趙琰の博士課程のテーマでもある「日常と非日常のあいだ」、「日本と中国の間」をイメージさせるものにより近づいたことを感じさせるものであった。

最終作品の「陋室・茗」にはまだこの作品の位置づけのはっきりしない部分もあり、また追求しきれていない部分もあるようにも思われるが、彼女のこの4年間の着実な歩みが見られたこともあり、博士作品審査合格と判断した。

(総合審査結果の要旨)

趙琰の博士課程での中心となっている作品「陋室(ろうしつ)・茗(めい)」は彼女が4年間探ってきた、日本と中国を中心とした東アジアの茶文化をとおして発展した空間デザインを彼女なりに整理し、日中文化を生かし、さらに発展的に新たな表現で空間演出を試みた意欲的な作品となった。彼女の作品の出発点になったのは東京藝術大学の古美術研究旅行の際に見学した、障子などによる茶室の繊細な光の取り入れ方に着目して日本の輪郭を曖昧に表現する美意識や非対称的な空間構成を見た事が出発点となり、空間の考察が始まった。かたや中国の伝統的な花窓に代表される明度比が大きいはっきりとした輪郭を表現する美意識や完全を求め対象形を基本とする空間構成の明快さもデザインに欠かせないと考え、日本と中国の優れた美意識を融合した茶空間デザインを模索した。この事から本研究は「日本と中国の空間デザインにおける中間領域」を探る研究であったとも言える。その研究成果としての空間作品は壁に中国の伝統的な花窓のイメージの窓を現代的解釈で組み込み、日本の茶空間の特徴である緩やかに外と内とをつなぐ事にある程度成功している。ダンボールと毛糸を素材として選択したことは、日常ありふれた素材で新たな美の価値を見いだす為であり、それは千利休に一つの到達点を極めた日本の茶の空間の本質にも繋がる。さらに作品題名の意味にもなっている事からも整合性のある選択であった。この素材の選択により、造形的に通常では考える事ができないあらたな表現を生み出し、新しい繊細な空間の繋ぎ方を提案できたのではないかと言える。

論文については一部に空間の具体的な検証不足を感じるが、日中の茶空間や茶文化をリサーチしながら、

現代の住空間のなかに設置する茶を頂く家具の考察を皮切りに、家具化した茶空間の可能性を考察し、より実験的な空間の提案を行なうための考察を繰り返しながら、単に伝統をそのまま継承するのではなく、空間デザインを通して日中の文化を融合し、東アジアの茶文化の発展的継承する手法が具体的な作品を通して明快に示されている。こうした考察は、複数文化との融合や伝統の発展的継承を指向する空間演出デザインにとってとても有意義なものである。

よってこれら総合的な判断から作品、論文ともに博士学位取得に相応すると認めることができ、合格と判断した。